

防災教育で地域連携

葉山中で「防災デー2025」

防災意識を高め、災害時に地域で貢献できる人材育成を目的に「防災デー2025」が11月6日葉山中学校（森岡孝校長・生徒数479人）で行われたII写真。



日本災害救援活動士協会創始者で町内在住の馬場賢親さんが講演で、過去の災害地での数多くの事例を紹介。水を汲むため井戸へ何度も往復した中学生らの活躍や、石巻の避難所で夜間のトイレに行きづらい高齢者や身障者をサポートした女子中学生グループの活動などを伝え、「災害が起きた時にはまず自分の命を守った上で、力を是非貸してほしい」と期待を伝えた。生徒から大人を担いで運ぶ方法や、同氏が

着けている装備などについて質問もあった。後半は町内外の15協力量体が行う24講座の体験学習を実施。葉山ロータリークラブは「災害時の水と食」での水の過実験や防災食の実食、葉山ハートセンターの医師らは心肺蘇生法を指導し、葉山災害ボランティアネットワークが「危ないところさがし」で生徒と校内を点検した。鎌倉を中心に活動する「防災普及学生団体（SAFE）」による救急車の装備紹介や怪我人搬送の体験もあった。最後に生徒たちは在住地域ごとに、自治役員との懇談会を行い、自治会の防災の取り組みや避難所運営の説明などを受け

た。東日本大震災を知らない中学生も7月末の力

下水道の仕組みを知る

葉山浄化センター見学会

葉山町長柄の下水処理施設の「葉山浄化センター」の見学会が11月15日に行われ、町民11人が参加したII写真。生活基盤を支える下水道の役割や仕組みを見て知ること

を目的に町が定期開催しており、昨年から累計約500人が訪れている。汚水が芝罘の中継ポンプ場に集められた後に4.7km先にある高低差35mの浄化センターへ圧送される全国でも珍しい方式を持つことや、主に微生物分解で1日約5千



よう地域とつながる防災の種まきはできたと思う」と初めての取り組みが地域防災へつながるよう期待を寄せていた。（K）

鎌倉案内

吉田茂穂著



鎌倉・鶴岡八幡宮から鎌倉の歴史・文化や史跡旧跡、別荘建築、同宮の年中祭祀などを迫力ある写真で紹介する鎌倉ガイドブックが発行された。鶴岡八幡宮監修・同宮吉田茂穂宮司著の鎌倉ガイドブックで、鎌倉の切通やぐら群、土王岩や建長寺上からの眺望、獅子舞台など「心に残る鎌倉十三の風景」や、旧華頂宮邸、古我邸、鎌倉文学館などの「鎌倉の別荘文化」、「鶴岡八幡宮の年中祭祀」には四季折々の写真が多数掲載されている。戦後、1945（昭和20）年にマッカーサー

にも見学会を予定。（申込は2週間前まで）。町営HPからも。下水道課046・876・1111



元帥が同宮を参拝していた秘史も紹介している。吉田宮司（83）は1966（昭和42）年に同宮に奉職し、1997年に宮司に就任。在籍59年にわたり、鎌倉と同宮を見守ってきた。「本来の鎌倉のあるべき姿とは何か、歴史都市鎌倉の使命とは何か、自分自身に問いかけ続けている」と投げかけ、「鎌倉に関心を寄せる人々に本當の鎌倉を伝えたい」とまえがきに思いを語っている。小学館刊、1650円（税込）。

『北鎌倉ふしぎ探訪改訂版』

企画編集 島村國治

鎌倉市山ノ内在住の島村國治さん（81）が『北鎌倉ふしぎ探訪（改訂版）』を発行した。2020年に作成した前著の『北鎌倉 路地巡りふしぎ探訪』に加筆、修正した改訂版で、1930年に開業した北鎌倉駅の当時から始まり、2023年10月の円覚寺洪鐘祭の行列まで、北鎌倉とその周辺の写真を掲載している。洪鐘祭の際、山ノ内八雲神社の面掛行列が復活したこと

ひと 国税のさらなる電子化利用を呼び掛ける 鎌倉税務署長 村山 康知 さん



野原でがれきの片付けなどもした。それまで公務員には興味がなかったが、法学部だったこともあり、行政に行こうと決意。東京国税局に国税専門官として採用された。いくつかの税務署で勤めた後、東京国税局本庁で2年勤務。その後、霞が関の国税庁に移り、個人課税にかかわる企画・立案などを

中心に、14年間仕事をした。国会担当をしたこともあり、国会議員の質問通告を受けて夜中まで働く生活も経験した。

個人課税課にいたときに東日本大震災が起きた。確定申告の時期だったが、仙台国税局は職員も被災し、機能がストップした。被災者の申告の修正など、膨大な事務への対応に追われた。

鎌倉での勤務は初めて。歴史と伝統がある街で、神社、仏閣と自然の融和が美しいと思う。観光客が多いところも、生まれ育った京都との親和性を感じ

る。景観条例があつて看板などを規制しているところも共通している。「ただ、京都にはない海があるのが鎌倉のよさ。海を含んだ美しさがある」

納税関係団体の人たちと話す機会もよくある。精神的なゆとりを感じさ

自宅でゆっくり読書のすすめ

大人が読みたくなる絵本 秋冬編（鎌倉在住・読書アドバイザーの選）

書影	書籍情報 & あらすじ	おすすめポイント
	『 かかし 』（2007年）シド・フライシュマン作 ピーター・シス絵 小池昌代訳 ゴブリン書房 畑に立てたかかしだけが友だちだった孤独なジョンじいさん。ある日そこへ一人の若者が現れて……。	まるで上質な短編映画を観ているかのような名作。ストーリーは淡々と進みます。若者と出会うことで、徐々にジョンじいさんの心の変化が。地味ながら、ああ、人生とは、と感慨深くなる一冊。
	『 おじいちゃんの口笛 』（1995年）ウルフ・スタルク作 菱木晃子訳 ほるぷ出版 老人ホームに住む孤独な老人と、二人の少年たち。やがて本物の祖父と孫のような関係になっていく。	北欧を代表する現代児童文学作家スタルク特有の、ちょっとシニカルでユーモアある文章が秀逸。血のつながりに関係なく、老人と子どもはお互いに必要な存在なのだと実感し、最後はホロリ。
	『 からすたろう 』（1979年）八島太郎作・絵 偕成社 勉強が苦手な、友だちとも交わることのなかった孤独な少年ちび。ちびの隠れた才能に気付いた先生は、みんなの前でそれを発表させ……。	コルデコット賞次席受賞。もはや文学。昭和初期の田舎の風景が郷愁を誘います。一人の教師との出会いが、子どもたちの関係性をも変えていく。真の教育がここに。涙なくしては読めません。傑作。
	『 ハリネズミと金貨 』（2003年）V・オルロフ原作 V・オリシヴァング絵 田中潔文 偕成社 ロシアのお話。ある日、冬支度をしようとしていたハリネズミは道端で金貨を見つけ、その使い道を考えます。	冬ごもり前の動物たちが、思いやりを持って、当たり前のように助け合う姿から考えさせられます。お金の価値とは、本當の幸せとは何か。平和ってこういうことではないのか。ラストも秀逸。
	『 月夜のみみずく 』（1989年）ジェイン・ヨーレン作 ショーエンハール絵 工藤直子訳 偕成社 ある冬の晩、みみずくを探しに月夜の森へと出かける父と少女の物語。コルデコット賞受賞作。	静謐—その言葉がこんなに合う絵本はないかもしれません。少女の静かな胸の高まり。人間も大自然の一部なのだ、ということを追体験させてくれ、神聖な気持ちになる一冊。
	『 雪の写真家 ベントレー（1999年）J・B・マーティン作 メアリー・アゼリアン絵 千葉茂樹訳 BL出版 、アマチュアながらも雪の研究と結晶の写真撮影に生涯を捧げたベントレーの伝記絵本。	コルデコット賞受賞作。実話をもとにした物語。人に理解されず、変人と思われても、自分の好きを追求する姿勢。そして、それを応援する両親。周りの目を気にして、色々諦めてきた大人にぜひ。
	『 ちいさなもみのき 』（1993年）マーガレット・ワイズ・ブラウン作 パーバ・クーニー絵 上条由美子訳 福音館書店 森の小さなモミの木と、病気の男の子の交流を描くあたたかなクリスマス絵本。	お祭り騒ぎのクリスマスではなく、静謐なクリスマスをどうぞ。春が来るたびモミの木をちゃんと森に返すところもいい。思いがけないラストに、寒さの中でも心あたたまり、優しい気持ちに。